

備後教区報

第 149 号

御影堂で清掃奉仕
神石組
児童念仏奉仕団

CONTENTS

- ◇視点「宗教法人の実務を再考」④
- ◇備後学僧侶逸伝^⑩
鴨川組勝願寺 足利義山
- ◇寄稿 東日本大震災被災地より
- ◇連載「ナーガールジュナ」②
- ◇NEWS&活動情報
- ◇予報・インフォメーション



寺院振興金庫のご案内

親鸞聖人750回大遠忌宗門長期振興計画の重点項目として「過疎・過密対策」が掲げられ、その対策の1つとして一般寺院の振興支援並びに国内開教の促進を図るための財的支援(貸付・助成)を目的に設置されたのが、「寺院振興金庫」です。この金庫が行う貸付・助成内容については以下の通りです。

なお、貸付利息は、実際に貸付を行う年度の4月1日の基準割引率及び基準貸付利率(公定歩合)に、0.5%を加算した数を乗じた額になりますので、ぜひご活用ください。

※貸付・助成申請にあたっては、各教区寺院振興対策委員会の事前審査を経て、寺院活動支援部〈国内伝道・寺院伝道支援担当〉へご提出ください。なお、申請期限は、毎年度9月末日までとなります。

宗派より周知の依頼が
まいりましたのでご報
告いたします。

◇お問い合わせ・ご相談は、各教区教務所もしくは寺院活動支援部〈国内伝道・寺院伝道支援担当〉まで
TEL 075 - 371 - 5181 (代表)
fax 075 - 371 - 8434

<貸付>

区分	貸付種類	貸付条件	貸付額		貸付期間 (据置期間含む)
国内開教対策	① 開教拠点の設置	国内開教の必要が認められる地域で、新たに寺院の設立を目的とした開教拠点を設置する場合	1口 100万円	上限30口 (特別に理由がある場合で総局が認めた場合50口)	20年以内 
	② 主たる事務所の移転・従たる事務所の設置	国内開教の必要が認められる地域で、寺院又は非法人寺院の主たる事務所の移転、又は新たな寺院活動を目的とした従たる事務所を設置する場合	1口 100万円	上限10口 (特別に理由がある場合で総局が認めた場合30口)	10年以内
	③ 都市開教専従員の開教活動資金	都市開教専従員の当初の開教活動資金として必要な場合	1口 100万円	上限10口	20年以内
寺院振興支援対策	④ 本堂新築・修復	寺院又は非法人寺院の機能の振興を目的として、本堂新築又は修復の場合	1口 100万円	(新築)上限20口 (修復)上限10口 	10年以内
	⑤ 境内建物その他施設・環境の整備	寺院又は非法人寺院の公益的活動の展開を目的として、社会福祉及び介護等にかかる施設や設備の新設・購入、並びに境内建物その他施設におけるバリアフリー環境の整備を行う場合	1口 100万円	上限5口	10年以内
	⑥ 寺院後継予定者就学資金	寺院後継予定者の就学資金として借り入れたい場合 (短期大学を含むすべての大学及び仏教学院における就学期間を対象)	1カ年 50万円	最長4カ年 (50万円×4年)	10年以内 ※就学期間終了後から返済開始
借換	資金の借換え	銀行その他の金融機関からの借入金の返済資金に充当する場合	上記①～⑤の借入目的を対象とし、同貸付額及び同貸付期間になります		

<助成>

助成種類	助成条件	助成額	助成方法
① 寺院の設立	新たに宗教法人たる寺院を設立したとき	40万円	住職の申請により、 寺院に対して交付します 
	新たに非法人寺院を設立したとき	20万円	
② 開教拠点の設置	新たに寺院の設立を目的とした開教拠点(都市開教専従員の駐留拠点含む)を設置したとき	20万円	
③ 法座活動の支援	寺院又は非法人寺院の活動支援を目的として、教区が人的支援を行ったとき(ex.住職が不在等の理由で法座活動が困難な寺院)	一法座につき3万円 (同一法座は年2回まで)	教務所長の申請により、 教区に対して交付します
④ 寺院の合併・解散	寺院又は非法人寺院が合併・解散及びこれに伴う境内建物の除却を行うとき	・寺院の合併・解散にかかる事務費 上限20万円 ・境内建物除却費用の半額補助 上限100万円 (該当費用相当額の1,000円未満は切捨)	住職等の申請により、 寺院に対して交付します

教務所職務担当表

教務所人事に伴い、9月1日からの職務担当に変更がありましたのでお知らせします。新しい担当は下記の通り

【職員職務分掌表】平成25年9月1日からの体制					
	菊池宗城	教務所長・教堂主管			
	担当者	教区関係		各種団体	教堂関係
賛事	法正映真	《教区総務》	《実践関係》	《矯正教化連盟》	《旧新見教堂》
参勤		《教区会》	《事業推進委員会関係》	《社推協》	《教堂総務》
		《教区会計》	《門信徒部会担当》	《連研・門徒推進員》	
		《賦課基準》	《災害対策委員会(会計含む)》		
		《護持口関係》	《同宗連》		
		《組長会》	《寺院振興対策》		
		《宗会選挙》			
主事	釋園信隆	《庶務・願記》	《同朋社会部会担当》	《仏教壮年会連盟》	《参与会》
参勤		《書 籍》	《平和のつどい》	《保育連盟》	《常例・法要》
		《せんべい》	《同朋三者懇話会》	《寺族婦人会連盟》	
			《FM専門委員会(会計含む)》	《門徒総代会》	
			《法式法務専門委員会》	《講 社》	
録事	藤井晃宣	《備品管理》	《広報伝道部会担当》	《布教団》	《教堂会計》
参勤			《キッズサンガ(会計含む)》	《仏教婦人会連盟》	《責役総代会》
			《I T 専門委員会》	《ビハーラ備後》	《教堂営繕》
			《教区報専門委員会》	《少年連盟》	
				《仏教青年連盟》	
				《寺族青年》	
				《スカウト指導者会》	
教区勤式指導所		内 容			
《勤式指導員》藤田徹信		定期練習会、前期・後期研修会、その他講習会、出張勤式練習会			

Close-Up-Bingo

クローズアップビンゴ Gakusou Itsuden

文政7(1824)～明治43(1910)

備後学僧逸伝

(其の十)



鴨川組 勝願寺 第23代住職

足利義山

(号) 泉水 (院号) 願海院

明治の代表的な仏教の碩学で往生の際に紫雲が湧き昇ったとも噂された程(紫雲云々は和里子らによって否定されている)伝説めいて語られる和上である。一族に甲斐和里子、足利瑞義、足利浄円といった名だたる仏教者が輩出されたことから見ても後世に与えた影響は大きいといえる。その足利義山師については、今回と次回の二回にわけて特集して紹介していきます。(敬称略)

(文責) 教区報専門委

明治の高僧と謳われた仏教界の碩学・足利義山

【足利義山の略歴】

文政7年¹⁸²⁴12月30日、深津組光圓寺第12世・平山了随の長男に生まれる。

三歳¹⁸²⁶春に父は逝去。儒士・小早川

文吾(菅茶山の弟子)に漢籍を学び、

12歳秋に石泉僧叡の高弟・慧海(世羅組

正満寺)を頼り、甲山正満寺に訪れて寺内の私塾「学心館」に入寮。

嘉永2年¹⁸⁴⁹正月に結婚、勝願寺に入

寺して足利姓となる。慧海示寂後は、

石泉高弟の泰蔵より内典を学んだ。

天保14年¹⁸⁴³3月に20歳で得度。

嘉永6年¹⁸⁵³、慧海の安居代講の際、

師に従って京都上洛して得業に昇階。

明治10年¹⁸⁷⁷、本山の命で西山教校に

宗乗教授を努められ、これ以降は進徳

教校、博練教校、大学林、仏教大学の

教授など30余年間にわたって教育界

に携わった。11年¹⁸⁷⁸助教、15年¹⁸⁸²輔教、

17年¹⁸⁸⁴司教、24年¹⁸⁹¹10月には宗派最高

位の勸学を授けられている。

23年から前後7年間、当時の本願寺

大谷光瑞新門の学事係をつとめた他に

特選会衆、侍真補、教学参議部長等の

本願寺重職を歴任した。

22年安居で『選択集』を副講、28年

安居本講に『正信念仏偈』、その他に

「易行品」「論註」「四帖疏」「本典」等

を通講し、著書も多数残した。

31年¹⁸⁹⁸に大学林総理(学長)を任じ

られ、35年¹⁹⁰²4月には多年山務の功を

賞し宗主より院号「願海院」を授かった。

38年¹⁹⁰⁵に妻・早苗が示寂し、自らも

高齢の上に病のため教職辞表を出した

ところ、仏教大学(現龍谷大学)初の

名誉講師(名誉教授)の辞令を受けた。

39年安居で『易行品』本講を終るや

宗主は「殿中携杖」(殿中においても

杖を携えてよい)と特許された。

40年¹⁹⁰⁷、84歳の老体を省みずに安居

出席し大衆に列して会談、人々より

推服される。41年¹⁹⁰⁸6月には「耆宿」

(学徳優れた老大家の称)を授く。

同年11月に病で帰国して晩年を過

すが、43年¹⁹¹⁰6月16日、87歳で示寂。

翌44年、宗主は更に特別賞与第一種

第一等を追賞された。辞世に

「八十餘年罪似山。来生必定墮無間。

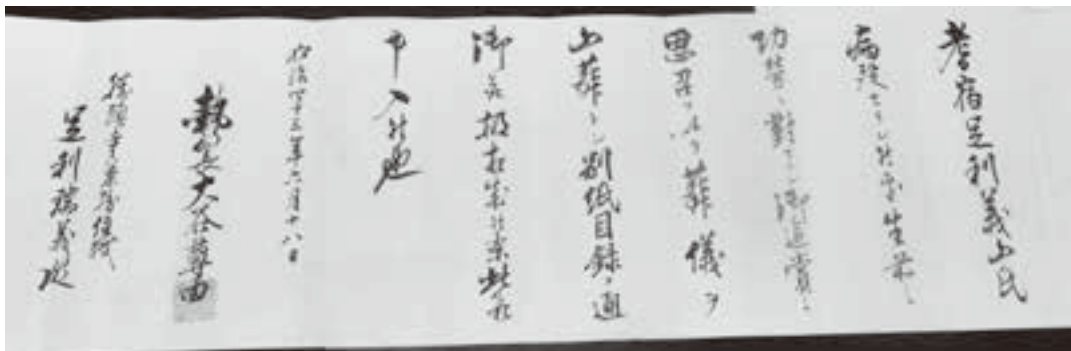
惟帰本佛弥陀誓。臨命終時意自閑。

生れずば覺らじとこそ誓ひてし

弥陀の御国に今ぞゆくなれ」と。

外に遺詠約七十首、法味津々

◀ 本山葬手紙 (芦田組明浄寺)



足利義山の葬儀は、生前の功により本山葬の礼をもて、芦田川原(晩年仮寓された明浄寺の側)で行われた。自坊勝願寺においても多くの門信徒が集い、和上の往生を惜しんで哀悼のうちに寺葬が執り行われたという。

義山は同時代の島地黙雷、赤松連城、大洲鉄然や同門の福岡浄観とは異なり、本山の制度改革や政治的役割を果たした和上ではなかった。60歳を過ぎてもから活躍し有名になったが、生涯を学問して底流を行った宗学者であった。義山の名を後世に広く知らしめたのは、むしろ足利瑞義(二代続けての勸学)や浄円(同朋舎・自照舎を主催)、甲斐和里子(京都女子大学創設)であろう。

勸学となつてからも専心勉学につとめて、多くの道俗に影響を与えた

【生涯ご法義研鑽に努めた】

義山は教学研究に終了はないと語り「これから何百年生きのびて研究しても奥を究めることは思いもよらぬ」と努められ、学者として後進の指標となったという。

義山が常に言われた言葉として、「僧侶は動もすると学問ばかりに執われてお聖教を拝見するにも、わが身に其の味わいを得る事を忘れて単なる研究に流れてしまう傾きがある。或いは布教に執られて如何にして人を感動させようかと言う工夫にのみ没頭し、説教がうまく出来なると、ただ話し方の上手下手に終わってしまう悪い癖がある。そこになると却ってお同行の方が真面目で、後生大事の一筋で法を求めるから、学問は知らないでも人に話は出来んでも我が身にお味わいを頂いた人が多い」と諭されつつ、義門

の研究と安心領解とを混じてはならぬと誠める人であつたという。

娘の甲斐和里子によれば、様々な疑問や文句を並べて質問しても叱りもせず諄々（じゆんじゆん）と説いて聞かせて「繰り返し繰り返し研究すればするほど奥が深うてどこまで行つても際限がない、一つづつ解らして戴く度ごとに

よくもよくもかほどまでにと一人心に叫んではお念仏を称えて恐れ入る事である。親鸞様はとにかくドエライものよのう」と口癖のように感服していたという。又、「あんな難解なところを、よくもまあ、此のように安らかに御解釈くださったことかいな、自分の学問がすすめば進むほど余計有難うてのう」と話すうち追々声がふるえ出して来て、とうとうベソをかいて話を中止し泣き泣きお念仏している姿が父の最も強烈な印象

である、と偲（おも）はれている。

「師や宗学の蘊奥（うんおく）を窮め、安心の精微（しんぎ）を説くもの極めて懇切周到。聴衆をして仏恩に感泣せしむ」と讃えられた和上であるが、むしろ法話の結びに毎回自らが法悦の涙を流して、一文不知の尼入道に同じく法味愛樂される人であつたようだ。

【仏教学者として慕われた】

桐溪順忍は「足利義山和上ほどのありがたい学者はいない」とよく語っていたという。その理由は、学問をどれだけ深められても聴聞は怠らず総会所にもいつもお参りに来られたことによるとか。

ところが或る時、「和上が参つていたら布教使が話をしにくい」と職員から聴聞を遠慮するように言われ「ワシは聴聞も出来んように

なつた」と泣かれたという。それからは講師に見つからぬように俗服を着て来られ、柱の影に隠れたり、始めから終わりまで俯（うつむ）いて聴聞するようになったという。

こうした学者肌の義山を慕う人は多く、その一人である武田龍栖（たけだりゅうせい）は本願寺の勸学職についた報告に京都大谷の勸学谷にある義山の墓前に参詣し、「和上さん有難うございました。和上さんは勸学になつてから更に猛勉強をなさいました由、承つておりますが、及ばずながら私もその真似だけはさせて頂きますから御安心してつかあさいませ」と誓われたという。

又、新門の学事係を共に勤められた前田慧雲（まえだえうん）は義山が「アンタとは永いあいだ議論して学んだが、学問も議論も結局何の役にも立ちませんのうや、往生の一大事に至つては、アンタもワシもただの老翁（らうおう）にならねばいけません、思えば思うほど広大無辺な大慈悲でありますのうや」と云うておられた。「あんた達もお父ツつあんこの言葉をお忘れないうにしない」と、義山が亡くなってから後に会うたび毎にこのことを慧雲が聞かせて下さつたと足利瑞義は語っている。

▼義山墨跡の著書など



▼『六要摘解』（勝願寺）



義山自筆本は欄外にも書き込みが多い



▲義山の勉強されたノート

土星や木星や日食の仕組みなど当時先端の科学も学ばれた事が窺われる。福間浄観師にも類似のノートあり。

【慧海・泰嚴の両和上に学ぶ】

義山が内典を学んだ慧海と泰嚴は二人とも石泉僧叡の門下で、いずれも本山の勸学、学林年預(代表)を任命された程の学僧である。

義山は少年期から慧海に学び、嘉永7年¹⁸⁵⁴に師が示寂するまで甲山の寮にて学問を続けていたという。

その後、同門の先輩・護命(元は石泉門下で師の示寂後に慧海門下に入る)は安政4年¹⁸⁵⁷に安芸山県郡でおきた異安心を泰嚴と糾明・解決に貢献したことで芸備の宗門取締役を宗主より任じられた。

この頃、苾園学派(大瀛孫弟子)の了嚴が「救いは仏の中で完成している(法体成施)」と強調したことに對し、泰嚴が異をとнаえて公開論文を請求。これが宗義上の問題となつて護命は「弥陀をタノムという信相は法体中にはなく、衆生の上に来て初めてタノムの信となる」と反論し、万延元年¹⁸⁶⁰に論争対決を行った。

終始これに関わつた泰嚴は慶応2年¹⁸⁶⁶に『明来闇去弁』を著して、この信相論争を総評している。

護命が法論の渦中にあるなかで、義山と泰嚴との接触も増えていき宗学を考究していく上での第二の師となつていったのだろう。

【東陽圓月と滅罪論争】

東陽圓月(1818〜1905)は、豊前学派の巨匠で、各地に巡錫して大いに教化の実をあげた勸学和上である。

圓月は明治23年¹⁸⁹⁰夏安居の際に、撰抑二門、信後造罪の問題について「体滅相存説」(信の一念にあらゆる罪は消滅して正定聚の人となるから、信後は地獄行きの機というべきではない)を主張した。

これは義山や松島善讓の説とも対立して聴衆の反対を受け本山の取調べとなり、結果的に安心に不正はないが義解穩かならずと判決せられ停講を命ぜられた。

このとき義山は「いわれ滅罪説」という義を立てているが、その内容は「願力不思議をもて消滅するいわれあるがゆへに」を根拠に一念滅罪の所談は義として滅罪する(事実においては煩惱は断ぜられぬけれど、そこに消滅したのと同様のいわれがあるとし、自己にあつては信前と後で変わることなく煩惱を断じる相はない)と主張したものの。

そもそも義山は資性温厚、人に接しては和顔愛語、敢て争わずと評される方であつたが、その法話には「人面獸心で貌は人でも心は鬼なり(中略)己は人間と思えど

石泉学派の流れを受けつつ折衷的学風を築く

も、慈悲がなければ人とはいわれぬ、慈悲がなければ仏の心にはかなわぬ。(中略)暫時も忘れぬやう人を害せぬ様、物をあはれみ恵みをかけねばならぬ」といったように人間の本质に對する徹底した慚愧・反省による実践が多い。

(義山の学んだ石泉学派が信後実践論を重要視している面があるので)機相から見て「空しく地獄に落ちこんでゆく」という義山と、法徳から見て「地獄行きの機がない」と断言する圓月の滅罪説に對して、平素の温厚に似ず峻嚴犯すべからざる態度を以つて反論したのだろう。

【是山惠覚と義山】

義山の話から少し余談となるが、是山惠覚(世羅組真行寺)が進徳教頭の教頭であつたとき、学生が教頭排斥のストライキを起こしたという。

その理由は以前の教頭が麻衣に黄袈裟で来られる老齡な足利義山であつたことに對して、後任に來たのが三十代若盛りの惠覚で洋服に洋杖、オールバックの頭髮に鼻下には八の字の髭で毎日通勤する上に、学生に對しては頗る嚴格な

ことも一因であつたようだ。

(これは京都の顕道学校校長をつとめた時、時代に合わせて洋服・ネクタイにせねばならなかった)

だが最大の原因は、前教頭が芸輶石泉だつたことに對し、空華学派の(松島善讓門下で学んで)石泉を邪説のように考へておられた惠覚が教壇で前教頭の学説を非難攻撃したことが大いに反感を受けたようだ。

安芸有志の奔走尽力によつて事は治まり、その学期は無事に終了したものの惠覚は大に決心して辞職。

頭髮も口髭も綺麗にして、自坊に引きこもるように石泉の研究を始められる契機となつた。

義山は石泉の流れを受けつつも学派に固執せず、空華龍華播南の学説も研鑽し折衷的学風を築いたが、その後の惠覚に至つて諸学派の折衷融合が更にすすみ、石泉の学説を広く紹介することで石泉学派が見直されることに繋がつた。



▶義山の墓は惠覚の題字と伝わる(勝願寺)

『草かご』に語られる義山

和里子の記した『草かご』から義山の人柄を一部紹介したい。

父は肉類があまり好きでなかった。ある時、鯛の御吸物の蓋をとって「御開山様が初めて魚肉に御箸をおつけになった時どんなにかお嫌であつたらう」と云うてハタと蓋をした。「然し御開山様はお父さんと違って肉類がお好きであつた故かもしれないよ」と云うと「お前は何という勿体ない事を申すのか。今でも他宗には婦人を近づけず肉類を口にせず、という律僧は随分おられる。わしのような下根下劣なもので、そのくらいな克己(こつぎ)の欲望にうち勝つこと」は易々たる事である。御開山様ともあろう御方がお好きで何のなさろうぞ、全くわし等に心配させまい為ばかりであるのに、お前はそれが分からんのか、思えば思うほどお前は勿体ない事を云つたのう」とお念仏せられた時は私は穴へ這入りたかった。また父の勉強ぶりは誠に涙ぐましいもので、蚊やりを焚くと蚊が死ぬるから焚くなど云う。団扇で扇いでいると「もうよいからあちらへ行け、実は今そばに誰もおらぬ方がよい、気がちるから」と云う(中略)行火

(参考書籍)

『義山法語』、『草かご』、『落葉かご』、『安芸門徒』、『高松悟峰語録』、『一枝群芳』、『足利義山とその一族』、『浄土真宗辞典』その他多数

(次号・後篇に続く)

浄瑠璃・能・舞も楽しむ面も

にあたつて読んでもらうことにした或る時、火で蒲団を焼いて焦している。お眠りなさいましたかと云えば「イヤちよつとも眠らぬ、この御本を全部拝読して畳んで押し戴いてから見てみたならこんなに焼けていた」と云う。私は心で泣いた。こう書いてくると父はただ書物を読むだけの人であつたようにみえるけれど、そうばかりでもなかった。また気分転換と称して七条大宮の宝座という五錢芝居にも変り目毎によく行かれた。兄(日野義淵)に「新門様の御学事に勤務中は小芝居見物は御遠慮なさる方がよろしいでしょう」と諫止されても「こうすれば、わしということに誰にも分からね」と赤毛布を着て頭巾を深く被つて相変らずゆかれた。それで黙つて見ておられると良いのに「ようやるのうや、才子ぢやのうや」など絶叫せられるため、一層人々の目について、幕間毎に見物人一同父ばかり眺めて面白がつてどうにもならぬ(中略)浄瑠璃もよくかたられた。忠臣蔵二度目の清書、菅原伝授源蔵住家の段などは素人離れしていた。舞も上手であつた。旅順陥落の夜は文中園(後の文中女学校)の寄宿生達に交わつて丹前を着て、斎藤太郎左衛門を踊られた。

【晩年における義山】

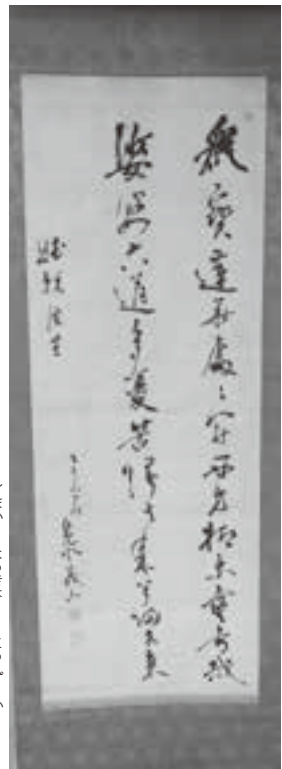
病で帰国してからは府中明浄寺に滞在して、娘の介抱をうけつつ遠近から訪ねてくる同行衆に法話をしたり、役僧達を集めて阿弥陀經の講義をしたり、和歌を詠んだりして過ごしたという。

臥床のままで「如来様が寝たままでも御報謝行のつとまるように御念仏を御成就くださつてあるので、精出してお念仏して居るから淋しくもなく退屈でもない」と語り、日々ご報謝行を続けられた。

晩年の様子を『高松悟峰語録』には、次のように紹介されている。

『足利和上御示寂の前年、或日を期して、備後府中町明浄寺に御見舞申せし時のことで、高松和上と共に早朝、広島駅より乗車し(中略)福山駅で下車して、ガタ馬車に乗り、明浄寺に入りし時は午後2時頃であつた。御本堂では

衆宝(国土)の蓮華が處々に開く 西方極樂は実に奇(素晴らしい)哉
娑婆六道は憂い苦しみ多し 歸去來(故郷浄土に) いざ歸らん



▲『賦願往生』(世羅組正満寺)

盛んに仕舞や謡曲、好事家の満堂であつた。日野義淵師の未亡人が、すぐ本堂の足利和上へ知らせる。庫裏に歸られた老和上なかなかの御喜びであつた。「ようこそ御見舞い下さつた。京都から此の田舎に歸りましてからは来る人が愚僧ばかりで話相手にならぬのでそれは淋しいことです。どうぞ御研究して下さい。今日は御能を見て楽しんで居ました」と仰せられつつ、御手元の短冊へ歌を二枚、別に書き置きを二枚と二人へ御形見に下さいました。御馳走も出て「宿られい、ゆつくり話しましょう」と申されましたが、都合で扨(ひたひた)なく忽々辞去しました。之が最後の別れとなりました。

高松悟峰は義山高弟で広島に真宗学寮を創設、師風をよく伝えた。

義山在世の百年前に見られた風景がありありと偲ばれるようだ。

「ここに来て、現実を見てほしい」「忘れないで」

2年が経過した東日本大震災の被災地

「五期会」の視察に同行

読者の 投稿 寄稿



連続研修(「連研」)の講師養成のための中央実習第五期を終了した有志の集いに「五期会」という会がある。年に一度、研修を兼ねた親睦旅行を行っている。今年は5月29日から31日までの2泊3日の予定で、東日本大震災の被災地・宮城県を訪問した。震災から二年が経過した被災地。津波被害の象徴的な建物の解体が始まり、生活の表面上は少し落ち着いてきたかのように見えるが、時間の経過とともに新たな問題が次々と生まれている。「ここに来て、現実を見てほしい」「忘れないで」という思いに応えることができればと企画された。参加したのは東京、新潟、大阪、兵庫、備後、福岡の各教区の住職、坊主ら12名。案内は震災直後から三ヶ月にわたって現地入りし、救済物資などの輸送を行ってきた福岡教区の郡島俊紀・光照寺前住職。備後教区からは小島照行・法泉寺住職が参加。以下、同行の許可をいただき写真を中心に、二年後の被災地を追った。

(教区報専門委員)

宮城県の閑上町から、気仙沼、南三陸、女川、石巻市へ



▶仙台別院には備後教区の備龍会など寄贈した支援車があった



一行は29日午後2時、各地より宮城県の仙台空港へ閑上町の語り部を訪ね日和山、閑上中学校を視察。津波被害が大きかった仙台市宮城野区蒲生の本願寺派専能寺(足利寛之住職)に参拝。30日は仙台別院のお晨朝に参拝後、気仙沼から南三陸町の海岸沿いを南下。南三陸町歌津の民宿「やすらぎ」に宿泊。最終日の31日は大川小学校、女川町から石巻市に入り、門脇町の本願寺派称法寺(細川雅美住職)に参拝した。

仙台市蒲生の専能寺

今年三回忌を勤めたのは70人を超えたという。



本堂も庫裡も仮の状態。それでもご法義をよるこぶ人々が。



井戸水が人々を救った

大震災のあの日、この集落は津波にのまれ、46戸のうち、35戸が流失。すべての道が途絶え支援物資が届くことはなかった。



三浦千恵子さんが女将をつとめる民宿「やすらぎ」はかるじて残った。32人が身を寄せ合い、先人が残した井戸水が役に立ち、2週間生き延びることができたという。「笑顔で懸命に生きる姿を未来を生きる子供に見てほしい」と。また、本願寺派のボランティアにお世話になったことについて「私は禅宗だが、いつか、本願寺さんにお礼に参拝したい」と。

心だけは流されなかった

仙台市の閑上町^{ゆりあげ}900人以上が亡くなったという。5月カナダの支援で水産棟が建ち、復興へと立ち上がっている。語り部の一人・菊池訓子さんは「海が見えないのが残念だ」という子どもたちのためにも、「心だけは流されなかった」と、支援に支えられて復興に取り組んでいる。小高い日和山には昭和8年の地震と津波についての石碑「地震があつたら、津波に用心」と刻んであった。菊池さんは先人が残してくれたのに、と残念がる。



地震があつたら、津波に用心

先人が残してくれたのに……

被災のモニュメント。新たな町や市場も



本堂は手つかず。称法寺

石巻市門脇町の本願寺派称法寺は今も津波の爪痕が残されている。地震の日、住職は仙台別院へいて必死の思いで帰坊しようとした思いには心が痛んだ。

写真中央下に見えるのが、本堂。津波は前の製紙工場の紙の原料を運び、より悲惨な状態になったという。

ある程度、瓦礫はかたづいてるが、お寺の前まで地上げされる予定とか。本堂も手つかずの状態。梵鐘は流されたまま。住職の「今後どれだけの人が帰ってくるのだろうか」の言葉に復興の難しさを感じた。



最新の研究によって知られる

ナーガールジュナ―龍樹菩薩―

連載 第2回

親鸞聖人の仰ぐ龍樹像

正信偈の記述

わたしたちの知る龍樹というのは、親鸞聖人の著作に出てくる龍樹菩薩、特に正信偈に説かれるその人です。そこでは次のように言われます。

釈迦如来楞伽山 為衆告命南天竺
龍樹大士出於世 悉能摧破有無見
宣說大乘無上法 証歆喜地生安樂
顯示難行陸路苦 信樂易行水道樂
憶念弥陀仏本願 自然即時入必定
唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩

お釈迦さまが楞伽山^{りやうがせん}で人々に語りました。「南インドに龍樹という偉大な方が現れて、有や無の邪見をことごとく打ち破るだろう。そして大乘のすばらしい教えを説いて、歆喜地(菩薩の十ある階位のうち下から二番目の位)に至り、極楽に生まれるだろう」と。龍樹は難行するのは陸路の旅のように苦しく、念仏の教えを信じ



ることは易行であつて水路での旅のように楽なものだ、と指示になりました。阿弥陀仏の本願に気づき念仏をとねえれば、おのずからただちに成仏は定まる。ただ常に如来のお名前をとねえて、その大悲や誓願のご恩に報いるべきである、と。

親鸞聖人の著作を読むと、聖人がいかに多くの仏典に精通されていたかがわかります。大蔵経を何度か読破されたという話もまんざら嘘ではなさそうな気がします。ここでは、聖人が『楞伽經』を読んでおられたことが分かります。「南天竺」の比丘である龍樹が「有無の邪見」を破し、広く「大乘」の教えを説いて「歆喜地」にまで到達し、最後は「極楽に生まれる」というお釈迦さまの授記(仏となる確約)が出てきます。これは龍

樹よりも後の時代に来た経典です。

それから、「難行易行」の話が出てくるのは龍樹の『十住毘婆沙論』です。鳩摩羅什の翻訳とされませんが、実は彼自身の加筆があるのではな

いかと疑われています。龍樹の教えを中国人にもわかりやすく伝えるために改変したのでしょう。龍樹のものではこの他に、『大智度論』(こちらも鳩摩羅什訳)を聖人は読まれていました。

両書には阿弥陀如来の極楽浄土をたたえる記述や、念仏をすすめる記述が出てきます。ともに龍樹作と伝えられますが、『大智度論』にも漢訳の際の加筆がかなりあるといわれています。両書の内容を比べると矛盾する記述も多くあることから、筆者が違うのではないかという説まであります。これらはまだまだ謎の多い書物なのです。

龍樹の著作

龍樹に帰せられる著作は他にもたくさんあるのですが、実は、西

方浄土に関する記述があるのはこの両書くらいです。さらにいえば、これらの浄土思想は漢訳の際に加筆された可能性があります。ですから、親鸞聖人の思い描く、これらの漢訳から浮かび上がってきた龍樹像は、実際の龍樹とはズレがあるかもしれないのです。現在では漢訳仏典だけではなくサンスクリット原典が次々に発見されており、また原文に忠実な翻訳で知られるチベット訳の仏典を参照した研究も進み、次第に龍樹の著作の姿が明らかになっていきます。

そもそも『大智度論』の「智度」とは「般若波羅蜜多」のことです。つまり、この書物は『大般若經』の注釈書なのです。『無量寿經』とか『阿弥陀經』でないのが意外かもしれませんが、実は龍樹は『般若經』に出てくる「空の思想」を体系づけたことで有名な、学僧なのです。そして彼は後に、仏教最大の学派、中観派の始祖として崇められることになります。

龍樹の真作と考えられる著作の中には、仏教内外の他学派と論争する書物や、王へ政治の心得を説いた書簡、ブツダをたたえる讃歌など様々なジャンルのものがあり

ます。それらのいずれにも説かれるのが、「空の思想」なのです。残念ながら浄土信仰に関しては、先の二書以外では皆無といつていいほど出てきません。

宗祖の龍樹像と

実像との接点

とはいえ、親鸞聖人の思い描く龍樹像がまったくの虚像かといえどもありません。龍樹の教えの核心である空の思想を、「有無の邪見を破す」というかたちで紹介しています。「有無の邪見」とは、本当は存在しないものを存在すると誤って考える「有」の見解、そして実際はそこに存在しているのに存在しないと誤って考える「無」の見解、という二つの正しくないものの見方のことです。龍樹は、目の前のものごとを、存在しているのでもなく存在しないのでもない、と捉えるべきだと説かれたのです。それが「空」というものの見方なのです。

次回はこの「空の思想」をくわしく見ていきたいと思います。
(備中里組浄心寺 津田明雅)

& 活動情報

News

声明の源流を学ぶ

【勤式】6月12日、前期勤式研修会が開催され、僧侶・門信徒合わせて38名が参加した。講師は大八木正雄師(中央仏教学院通信教育部部長)。講義は「声明の源流」と題し、声明がインドで発祥したところから中国を渡り、日本に伝来するにつれて体系的に整えられてきた経緯や、正信偈が唱えられるようになった背景等で、本願寺声明が今の姿になるまでの経緯を学んだ。



子どもに阿弥陀様のご縁を

【寺婦】5月13日、若婦人研修会が鴨川北組正明寺にて開催され、寺族若婦人39名が参加した。講師は松月博宣師(中央キッズサンガ推進委員)。講義は



「私のキッズサンガ」と題し、これからキッズサンガを進める上で、の種々提言をいただいた。

いのちの教育を学ぶ

【寺婦】6月7日、寺族婦人会連盟(不二川演恵委員長)総会並びに研修会が開催され、教区内寺族婦人が多数参加した。

午前中は総会が行われ、午後の研修会では海谷則之師(龍谷大学名誉教授)が「親鸞聖人といのちの教育」と題してお話され、浄土真宗の教義の上からいのちについて考えること、また、み教えを抛り所とした教育について学びを深めた。



医師と僧侶が安らぎを

【ビハーラ備後】6月25日、ビハーラ備後では、総会及び公開講座を開催した。任期満了に伴い新役員体制となり、長年会長を務めた桜田淑子会長に代り田口竹子会長が就任した。

午後の公開講座では、大嶋健三

教区月報

平成25年5月

1日	同朋社会部会
7日	門信徒部会
7日	勤式練習会
9日	連区議長・所長会同 (10日 備後)
9日	ビハーラ備後役員会
11日	常例法座
13日	寺婦連盟若婦人研修会 (鴨川北組正明寺)
15日	保育連盟中四国連絡協議会 (16日 備後)
22日	三者懇専門委員会
23日	寺婦連盟役員会
27日	広島同宗連総会
28日	実践運動委員会全体会・総会
30日	中四国寺青野球大会(下関)
30日	仏婦連盟役員研修会
31日	キッズサンガ委員会
6月	
1日	中四国仏青連盟連絡協議会 (2日 備後)
1日	中四国仏壮連盟連絡協議会 (2日 四州)
3日	同朋三者懇(尾道)
3日	勤式練習会
5日	門徒総代会世話人会
5日	布教団役員会

郎師(あそかビハークリニック院長)がパワーポイントを使い、終末期を迎えた患者との接し方についての講義をされ、花岡尚樹師(同院ビハークリニック)が法話を交えながら死との向き合い方を話された。このクリニクでは医師と僧侶の連携により、患者が安心して苦しみ立ち向かえる環境作りを心掛けている。



「身元調査」の実態を学ぶ

【同朋社会部会】NHKの番組で「過去帳」開示の様子が放映された問題を受け、本年度各組において同朋研修会を開催する運びとなった。この各組研修会開催に先立ち、同朋社会部が中心となり作成された



テキスト「過去帳又はこれに類する帳簿の開示問題に学ぶ」の事前研修会が行われた。第一回(6月19日)研修会では、組長、実践運動委員、同朋社会部員等が出席し、テキストの概要について学び、第二回(6月26日)においては、講師 藤井聡之師(安芸教区)に指導を受け、各組での研修会開催に備える。

布教の基本を学ぶ



【布教団】布教団研修会並びに総会(6月20日)および夏期布教大会(同21日)が開催された。研修会では、白川晴顕中央仏教学院院長を講師に招き、布教大会では団員4名の布教使にあわせ白川先生にもご法話いただいた。布教大会団員出講者は次の通り(出講順・敬称略)

▽枝広 大智(深津組崇興寺)
是山 宗憲(世羅組真行寺)
石川 知全(沼隈西組正圓寺)
藤井 義英(比婆組西教寺)

保育者も抱きしめられたい

【保育連盟】7月21日、22日、保育連盟(熊原得也委員長)では、備後教区担当による中・四国ブロックまことの保育大学講座を神石高原ホテルにて開催した。本願寺派布教使の赤川浄友師が「お天道さまは見ている」宗教教育の必要性」と題し講演の後、子ども家庭教育フォーラム代表の富田富士也師が「だっこ、よしよし、泣いていいんだよ」先生だってだしめられたい」と題して講演を行った。現代様々な困難が立ちのだから「保育」について、僧侶の立場と心理力ウンセラーの立場でそれぞれのお話を話された。連盟加盟園園長をはじめ、関係者約200名が参加。



6日	岡山同宗連研修会
7日	寺婦連盟総会
11日	教堂常例法座
12日	前期勤式研修会
13日	教堂責役総代会
13日	常備会
17日	岡山同宗連30周年記念行事
18日	実践運動常任委員会
19日	同朋テキスト事前研修会
20日	布教団研修会並びに総会
21日	夏期布教大会
22日	中四国仏婦連盟連絡協議会
25日	ビハークリニック後援会・公開講座
26日	矯正教化連盟全体会
26日	同朋テキスト事前研修会
26日	同朋社会部会
26日	教堂財産管理委員会
28日	自死を考える学習会
28日	保護司民生委員のつどい
7月	
2日	連研のための研究会
3日	勤式練習会
4日	キッズサンガサポーター協議会
9日	中四国少年連盟指導者研修会
10日	(10日 四州)
10日	矯正教化管区支部総会
10日	門徒推進員連絡協議会
	(11日 山陰)

【仏壮】7月28日、今年の仏壮連盟(石井輝美委員長「夏期研修会」を、講師の藤井邦磨・仏壮連盟活動推進講師をお招きし、世羅組光永寺にて開催した。講義では、「朋友の輪を拡げよう」わたしのできること」と題し、仏壮活動の必要性をお法りのうえからお話しされ、参加者101名が熱心に耳を傾けた。今後、単位会結成を検討している寺院もあり、活動が活発になることを願う。

幅広い世代に

五月二十四日から二十六日の三日間にわたり、尾道の浄泉寺を会場に備龍会結成四〇周年記念事業「お寺でフェスタ」を実施し、目標を大きく超える二八〇〇人以上の来場を頂いた。遠近各地、特に関東から来られた方が多かったことも予想外のことであったが、北は秋田県、南は大分県という広範囲からの参加を得たことは驚きだった。

備龍会結成40周年記念事業 お寺でフェスタ! お寺×アート×尾道。

「今日、生まれて初めてお寺の中へ入った。」という声も多々聞こえていたが、声明、法話が始まると皆真剣な表情で心を傾けられている姿には、お寺は何か大切なことを聞く尊い場所だと思っていただいていような気がして嬉しくなった。

振り返ってみて

頃お寺に来られる機会がない方にも足を運んでもらいたい」という思いがあった。そこで、お寺は「仏の教えを伝える」ということが大事なことはあるが、まずはお寺そのものの、そして仏教の魅力を触れてもらうことを大切に企画立案した。その意味では、二八〇〇人以上の不特定多数の人々に足を運んでいただき、直接「お寺」という空間を楽しんでもらえたことは何よりも喜ばしいことである。

ている若者、「このために東京から帰郷した孫と一緒に来た」と嬉しそうに話してくれたおばあちゃん、孫と一緒に露店で買い物をする姿も見られた。

本来お寺という場所は、誰もが気兼ねなく自然と集うことができる地域と密着した開かれた場所である。そこにはまさに、幼い子供から年配の方までが一緒になって、同じ時間を共有するお寺の姿があった。笑顔に溢れたその光景を見ていると、思わず胸に熱いものが込み上げてきた。

備龍会としてもこれほど大きな対外イベントを行うことは初めての取り組みであり、全てが手さぐりの状態。経験の乏しさから多くの方々に迷惑をかけ、きつと無理難題を押し付けてしまったことと思う。何事を行うにも一人ではできない、多くの人たちの力が集結して、少しずつ積み重ねて、はじめて成就できたのだと、しみじみとその有難さを噛みしめたことである。

浄泉寺様をはじめ、地域の方々、多くの皆様に支えられて、この事業を営むことが出来たことに心よりお礼を申さずにはおれない。ま

教区月報

11日	教堂常例法座
11日	法務法務専門委員会
16日	少年連盟総会・指導者研修会 並びにキッズサンガ公開講座
18日	門信徒のつどい
18日	組長会
18日	寺院振興対策委員会
18日	賦課基準等調整委員会
18日	災害対策委員会
20日	中四国保育大会
22日	(21日 神石)
22日	仏婦連盟常任委員会
28日	仏壮連盟夏期研修会(世羅)

た、備龍会の四十周年という歴史の重さ、われわれの前に高く法灯をかかげて歩みをすすめてくださった諸先輩方への感謝の思いが静かに確かに深まっていく。

そして何よりもこの事業に込めた思いが、ご縁に遇われたすべての方々の中で種となり、そしてたくさんのお念仏の花を咲かせることこそ、会員一同の念願するものである。

「お寺でフェスタ!」

実行委員会

※写真は16ページ

今後の予定

八月	21日	布教団研修旅行(～23日)
	27日	僧侶常備会
	28日	連区布教使研修会(～29日 安芸)
	30日	青年布教使研修会(御調東金剛寺)
九月	3日	勤式練習会
	4日	ビハーラ実践学習(ビハーラ花の里病院)
	6日	常備会
	10日	平和のつどい(福山リーデンローズ)
	11日	教堂常例法座
	14日	中四国真宗青年のつどい(～15日 瀬の浦)
	16日	東日本大震災現地学習会並びに千鳥ヶ淵戦没者追悼法要(～18日 東北・東京)
十月	20日	門徒推進員念仏奉仕団(～21日 本願寺)
	26日	連区実践運動協議会(～27日 山陰)
	1日	連区青年布教使研修会(～2日 山陰)
	2日	仏婦寺婦実践運動研修会
	8日	中四国仏婦大会(松江)
十一月	9日	三者懇(広島)
	10日	特別布教大会(世羅真行寺)
	11日	教堂常例法座
	12日	全国真宗青年のつどい(～13日 熊本)
	19日	連区仏壮会員研修会(～20日 四州)
	24日	後期勤式研修会
	25日	門信徒のつどい
	26日	門推連区実践運動研修会(～27日 山陰)
	28日	僧侶研修会
	30日	ビハーラ・門推合同実践学習(藤江荘)
十二月	7日	中四国講員研修会(～8日 かんぼの郷庄原)
	11日	教堂常例法座
	12日	勤式練習会
	26日	ビハーラ実践学習(寿園・相扶園)
	29日	教堂報恩講

インフォメーション

青年布教使大会

と き 8月30日(金) 朝席9時半 昼席1時

ところ 御調東組金剛寺

出講者(敬称略)

佐々木弘海 福間玄猷 藤井義英

苅屋光影 大塚裕玄 岡部正顕

平和の集い「原子力災害の今」

と き 9月10日(火) 1時～4時

ところ 福山リーデンローズ 小ホール

講 師 杉岡誠さん

(善仁寺住職 福島県飯館村職員)

公聴会

と き 9月13日(金) 10時～12時

「法灯継承式について」「実践運動について」

中・四国仏青研修会

と き 9月14日(土)～15日(日)

ところ 沼隈南組 善行寺

講 師 中村好孝氏(岡山龍谷高校専務理事)

内 容 「仏教を科学的に解明する」

講 師 梵大英氏(三次組専法寺)

内 容 「地域の中にあるお寺

～お寺から出るお坊さん～」

千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要並びに被災地現地学習会

と き 9月16日(月)～17日(水)

ところ 仙台別院 千鳥ヶ淵

特別布教大会

と き 10月10日(木) 朝席 昼席

ところ 世羅組真行寺

出講者(敬称略)

箱田義信 法宗正勝 栗原一乗

平山義隆 千葉隆誓 那須英信

後期勤式研修会

と き 10月24日(木)

ところ 備後教堂

内 容 「お内仏の華の生け方について」

僧侶研修会

と き 10月28日(月)

ところ 世羅組善行寺

講 師 浅田恵真(正博) 勸学

内 容 「叡山浄土教の展開」

12月 11月 10月 9月 8月

長谷川 憲章
(三谿組善徳寺)平山 智正
(深津組光円寺)福間 玄猷
(三次組源光寺)深水 正道
(沼隈西組光満寺)赤柴 宏丞
(三次組正正寺)

教堂常例法座出講者(敬称略)

寄贈

ありがとうございます
ございます

「ひざ掛け」備後教堂

深津組専明寺 洗心仏教婦人会様より教堂参拝者の方へひざ掛けを寄贈いただきました。参拝者からは「寒い冬もクローラーで足元が冷える夏も、両方使えるのでありがたい。私のお寺にもあったらいい」と好評の声。



得度許可

おめでとうございます
[敬称略]

鴨川組 教善寺

三次 香流(香流)

沼隈南組 善徳寺

佐藤 一弥(一称)

芦田組 善行寺

堤 寛子(寛浄)

三次組 眞楽寺

迫田 龍教(龍教)

御調束組 最圓寺

三浦 敬雅(鳳祐)

香典返礼

ありがとうございます
ございます

世羅組 弘願寺 様

より香典返礼を頂きました。

●人事について

今般、9月1日付、法正映真が教務所賛事に就任いたしました。また、7月1日付、村上恒河賛事が宗派社会部へ異動となり、新しく釋圍信隆主事が加わりました。

釋圍信隆(中組光福寺)



先般、7月1日の人事で本山式務部より異動して参りました、釋

圍信隆(中組光福寺衆徒)です。教務所業務・事務など未経験なところばかりですが、新入職員の気持ちで頑張ります。ご指導・ご鞭撻の程よろしくお願い致します。無趣味ですので地元で何か趣味をみつけないと思います。好物は「明治のこんぼう」です。

村上恒河(比婆組徳了寺)

短い間でしたがお世話になりました。

猛暑日記

「ゲリラ豪雨」…この原稿を書いている今、こんな言葉を幾度も聞き、実感する8月、夏真っ盛りです。所によつては、最高気温が40℃を超え、ゲリラ豪雨が猛威を振るい、熱中症や自然災害によって多くの被害が出ています▼そんな中、甲子園での連日熱戦が繰り広げられた球児の精一杯のプレーに心打たれます。私も高校時代、炎天下で白球を追いかけた一人ですが、ふと当時の様子を振り返ってみました。あの頃どれくらいの気温だったんだろう?▼高校3年生だった1997年8月、京都市の気温を気象庁ホームページで調べてみました。最高気温が35℃超のいわゆる猛暑日は2日。平均して約33℃ぐらいでした。それが今年はどうと8月10日現在です。で4日。参考までに昨年は12日。データからも気温の上昇は明らかです。また、当時から夏には夕立といわれる雨がよく降っていたと記憶しています。しかし近年夏に降る雨は、ご承知のように勢いが違います。学生時代までは、夏が大好きだった私ですが…▼お盆参りもいよいよ佳境です。冒頭の言葉に負けず、最後まで精一杯お勤めいたします。(Z)

お寺でフスタ!



「音聲空間」 光の映像演出の中での声明、雅楽、法話、そしてミュージシャンによる音楽ライブを勤めた。古今の音の繋がりを表現し、美しい音曲が満堂の堂内に響き渡った。



「子供コーナー」 お子様にも楽しんでいただけるように様々なアトラクションを企画した。西本願寺前の門前町のゆるキャラ「おりんちゃん」の登場には、子供も大人も夢中になった。



「お寺ART PROJECT」 庫裡、客殿、茶室などの日本伝統建築が現在アートに彩られ、新たな芸術空間として演出された。なかでも、二十四名の現代アーティストが注目を集めていた。また、夜にはキャンダルナイトが開かれ、鐘楼が蝋燭の明かりで彩られた。



監修は現代アーティストの石井七歩さん

